

一般演題 治療装置・運用 OP7-4

当院における高気圧酸素治療の導入後約10年間の現状と課題

○齋藤友孝 小竹亮輔 佐藤祐輔 松下鮎美
神園 武

〔地方独立行政法人 静岡県立病院機構 静岡県立総合病院
検査技術・臨床工学室〕

【はじめに】

当院は約720床の病床数をもつ総合病院であり、2013年度に第一種高気圧酸素治療装置（セクリスト Model：2800J）を1台導入し、2024年度にセクリスト Model：3300HJに新調した。

今回は2014年4月から2024年2月まで約10年間の高気圧酸素治療（HBOT）の症例数と課題をまとめ検証したので報告する。

【結果】

当院では一日当たり最大4枠の治療が可能であり、2014年度から2024年2月現在の約10年間の症例数計は138例、施行回数計は1,677回であった。

症例数における主な科の内訳としては、泌尿器科が32例で23%、皮膚科が29例で21%、耳鼻科が26例で19%であった。

主な疾患の内訳では、「難治性潰瘍を伴う末梢循環障害」が35例で25%、「突発性難聴」が25例で18%、「放射線傷害」が24例で17%であった。

年間の症例数では2014年度が21例で最多、2020年度が7例で最少であり直近の2023年度では16例であった。

【課題と考察】

一日の最大治療可能枠数の4枠のうちの1～2枠しか埋まらないことがほとんどであり、さらに基本的に土日祝日や緊急の治療は行っておらず、治療が全くない日が続くこともある。

また各診療科の中でも医師によりHBOTに関する興味や認知度が異なる傾向にあると考えられ、そのような医師の退職等によって治療の依頼が減少する可能性もある。

そして当院と同じ市内に当院より以前に第二種装置を導入している病院があり緊急治療にも対応しているため、HBOTを求める患者や近隣病院からの紹介の多くがその病院を第一選択としていることも考えられる。

【結語】

当院のホームページにHBOTに関する知識や情報を掲載することで認知度を高め、各科の医師にHBOTの有用性を改めて伝えるべく当院臨床工学室作成の資料の配付や勉強会を行う等することで症例数の拡大に努めていきたい。